
ドロップ

七瀬 夏葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドロップ

【Nコード】
N30280

【作者名】
七瀬 夏葵

【あらすじ】
雨が私を、闇の淵へと、誘う……。

酒を飲み、暴力を振るう父親から逃げるように、実家から遠く離れた土地へと就職した樹本 沙織。
ようやく安息を手に入れたと思っていた彼女を襲ったのは、精神的
外傷という名の新たな恐怖だった。

そんな彼女がある雨の日に出会った同郷の男性。彼との出会いをきっかけに、彼女は激しい運命の激流へと飲み込まれていく……。

いじめ、家庭内暴力、OD、リストカット、自殺未遂、鬱。
どこにでも溢れている、ありふれた悲しい現実の物語。溢れる雫は
雨か、それとも……。) 【レインキス】のヒロイン【沙織】
を主人公にしたスピノフ作品ですが、【レインキス】未読でも問
題なく読めます。))

プロローグ（前書き）

<注意>

この作品はフィクションです。現存する人物、団体、地名などは一切関係ございません。

【レインクス】の【沙織】が主人公のスピノフ小説ですが、【レインクス】未読でも問題なく読めます。

プロローグ

空を見てた。

あの時と同じ、梅雨の、霧雨……。

『雨の日に逢ったやつとは、大概いつも、長い付き合いになるんだ』
そんなジnkクスが口をついて出たあの日を、昨日の事のように思い出す。

気取った言葉を崩して、不機嫌そうな顔で、差し出した手を握り返した、あの人の、大きな、手。

皮肉めいた口調も、声も、その笑顔も、全部、こんなにも鮮明に覚えてるのに。

不器用なくせに時々強引な、あの、温かな手に触れる事はもう、二度と、ない。

胸が、痛む。

愚かなあたしが出来たのは、その手を離す事だけだった。

降り続く雫は今も、こんなにも簡単に、あの頃へと引き戻す。

鮮烈な、忘れ難い、思い出へと……。

「お兄ちゃん……」

雨が降ると、会える気がした。

あの頃のように。

だけど、そんな奇跡はもう起こらないって、嫌になるくらい、解ってる。

だからあたしは、空を見上げた。

溢れる雫を、隠せるように……。

Act・1 始まりの雨

雨が降っていた。

空にはどんよりとした灰色の雲が広がり、街は水と土の匂いで満たされている。

窓の外には世界を白く染め上げる、細やかな霧の雨が降り続く。

私はそんな景色を眺めながら、静かに溜め息を吐いた。

「今朝も雨、か……」

雨はキレイだ。思い出したくない事を沢山思い出すから。

視覚、嗅覚、触覚、聴覚、全ての感覚が、私を思い出の淵へと誘う。忘れたくとも忘れられない、忌まわしい思い出へと……。

窓辺から離れ、私はおもむろにベッドサイドの小さなテーブルから幾つかの白い袋を手に取り、中から無数のシートに連なる幾つもの錠剤を、パキパキと慣れた手つきで出し始めた。それらを手にのせ、傍らにあったコップに入った水と共に一気に口へ流し込む。

ゴクリ。

飲みこんだ水が音をたて、口元についた水を手の甲で拭った後、ふと小さく溜め息を吐いた。

「……いつまで、もつかない」

シートに残った薬の残量を眺め、ぼつりと呟いた。

病院にはなるべく行きたくない。しかし、薬がなければ、今の私はろくに眠る事さえ叶わない。通常の生活を問題なく生きる為には、通院も薬も欠かす事は出来ないのだ。

「まったく、面倒な身体になっちゃったな」

誰に言うでもなく呟いたそれは、ガラんとした室内に、物悲しく反響した。

ほとんど物が無い空間というのは、普通に話していても声が反響するものなのだ、この部屋で生活するようになって初めて知った。何しろ実家にいた頃は、絶えず物だらけの部屋にいたのだから、そんな事が分かる筈がなかった。

私、きもと樹本 さおり沙織は、今年の春、高校卒業後の就職を機に、地元から遠く離れたこの土地へと引っ越して来た。

同じ会社へ就職する人達と共に飛行機に揺られ、約2時間。海を越えた先にあるこの街は、私の知らない驚きがいっぱい詰まった、まさしく未知の場所だった。

見渡す限りの山と水田が広がる私の地元は、有人の民家までおよそ1km、最寄駅までは軽く3kmを越えるという恐ろしいまでの田舎である。

なんと、この時代にしては珍しく、テレビもろくに映らない。水道は井戸水を電動モーターで蛇口まで引いているだけの簡易水道、トイレは勿論汲み取り式の昔ながらの物で、当然携帯電話も使えない、凄まじいまでの田舎っぷりだ。

この現代日本において、そんな場所が未だに存在するという事に、同じ飛行機に乗った同期の子達も驚いていたが、実際そんな場所なのだから仕方が無い。

生まれ育った場所を悪く言うつもりは毛頭ないが、正直、文明の利器に慣れた現代人にとっては、さぞかし暮らしにくい場所に違いないだろう。

そんな場所からやって来た私だから、新しい場所で見える物全てが新鮮に映った事は言う間でもない。

立ち並ぶビルも、狭苦しく並ぶ車の列も、歩いて五分とかがからない場所にあるコンビニエンスストアも、全てが私には馴染みのない代物ばかりだ。

何より私が今いるこの寮の、この整然とした部屋。これが、今の私の生活の中で、【新しい感覚】を与えてくれている筆頭と言えよう。

私の実家はいわゆる【掃除の出来ない女】が主婦をしている所為で、綺麗に片付いていた試しがない。

家族で過ごす居間は勿論、各人の部屋は、最早他人を家にあげるなんて絶対無理！というレベルの、いわゆる【汚部屋^{おへや}】であった。

もともと、幼少の頃からそれに慣れて過ごして来た私にとっては、特にそれがおかしいと感じる事もなく、これまで生きて来ていた訳だが。

こうして単身遠い街へ就職、会社の寮の一室を自室として与えられてみて初めて気付いた。物が無い部屋では、音が反響する、という事に。

そんな事、今更知っても何の足しにもならないとは思っただが、とにかくこれまで物が溢れた部屋でしか暮らした事がない私には、そんなどうでもいい事実さえ新鮮な驚きを与えてくれている、という訳なのである。

そんな、新しい生活で希望いっぱい**の**筈の私が、どうして薬がないと眠れないほどの状態に陥っているのか。それは、一言で言うなら、私の心が、もう手遅れなくらい病んでしまっていたからだ。

私の家は、いわゆる家庭崩壊を起こしていた家だった。

父は毎晩酒を飲んで暴れ、時には外で暴力沙汰を起こして警察のお世話になる。そんな人だから、母は勿論、子供にも容赦はなくて、私はよく父に口応えしては殴る蹴るの暴力を受けていた。

そんな父から逃げたくて、高校卒業と同時に遠くへ就職を決めた訳だ。離れさえすれば楽になれる。そんな安易な考えを持っていた私だったのだが、事はそんなに簡単では無かった。

「・・・はあはあ」

会社の寮に入寮し、新しい場所で新しい生活を手に入れ、すっかり地獄から抜け出した気になっていた私を襲ったのは、悪夢という新たな恐怖だった。

私は毎日眠る度、夢の中で追いかけられ、襲われる恐怖を味わう羽目になった。

眠れば幾らもしない内に、悪夢を見て飛び起きる。全身に走る痛みと呼吸の苦しさに襲われながら・・・。

深呼吸して、あれは夢なんだと自分に言い聞かせて、何とか心を落ち着かせて再び眠りにについても、またすぐに同じように飛び起きてしまう。それを幾度となく繰り返しては、やがて朝がやって来てしまう。毎日がその繰り返しだった。

とうとう「大丈夫か？」と上司に心配される程にやつれてしまった私は、問答無用で医務室へと連れて行かれた。そこで医師に宣告されたのだ。「精神科へ行きなさい」と。

嫌々ながらも、身体が少しでも楽になるなら、と訪れたある病院の精神科で、私は自分が重度の不眠症、そして、鬱である事を宣告された。

「気長に治していきましょね」という医師の言葉はあまりに頼りなく、私は不安でいっぱい心を抑えながら、処方された薬を飲む毎を送る事となった。

「本当、いつまでもつのかな・・・」

今度は違う意味で咳いた。

このまま、薬で命を繋ぐような日々を、一体いつまで続けられたいと言っのか。分らないからこそ、私は不安でたまらなかつた。自分の身体は、一体どこまでもつのだろう、と。

Act・1 始まりの雨 (後書き)

【ドロップ】予告編

訪れる朝。向けられる爽やかな笑顔は、彼女に安らぎを与えてくれる。

たとえ夜毎恐怖が訪れるとしても……。

次回【ドロップ】第一章 Act・2 「日常」

雨が私を、闇の淵へと、誘う……。

Act・2 日常

今日は職場のレクリエーションがある日だ。会場は体育館なので、雨天でも関係ない。

私はまだジワリと全身を浸食する痛みに顔を歪めながら、それでも何とか支度に取り掛かった。

「えっと・・・ジャージジャージ・・・と、あった」

壁際に置かれた透明な衣装ケースに収納した数少ない服を漁り、私は目的の新しい下着とTシャツ、ジャージを取り出して着替えた。ベッドの枕元に置きっぱなしになっていたヘアゴムと、サイドテーブルに置いたままの櫛を掴み、部屋の外へと出る。

「おはようございます」

台所で料理をしていた同室の泉先輩に声をかけた。

この寮は一般で言う3Kのアパートのようなもので、3つの部屋にそれぞれ住人がいる。

玄関を開けるとすぐ左手に大きな靴箱があり、右手にはトイレ、正面にはシャンプードレッサーがあり、入って右奥のところには小さな台所までついている。

会社に入って五年目までは、大体このタイプの部屋で誰かと共同生活するのが会社の寮の習わしだった。

「おはよう。日曜なのに早いね。スズちゃんはまだ寝てるみたいよ？」

私の声に振り向いた泉先輩は、こちらを見てにっこりと爽やかに笑

った。

この人は本当にいつも爽やかだ。ショートカットの黒髪、陽に焼けた小麦色の肌、ぱっちりとした目に、通った鼻筋。健康的な美人であるその容姿に相応しく、性格もさっぱりしていて、少々の上では動じない大らかな人だ。加えて、優しい。

入寮早々に同室の先輩にいびられて参っていた私を見かねて、空き部屋が一つあるという同期の友達のスズから「部屋に來ないか」と誘われた時は戸惑いもしたが、この泉先輩を紹介されてからは安心して部屋を移る事が出来た。この人ならきつと大丈夫。そう思った。案の定、泉先輩は部屋を移って來た私に嫌な顔一つする事なく、むしろ色々と気にかけてくれた。本当に、凄くいい人だ。

「あはは。スズは日曜は一日寝るって断言してましたからね。私は今日は部のレクリエーションでミニバレーやるから、出かけないといけないんですけど」

昨日、夜遅くまで深夜のお笑い番組に釘付けになっていた姿を見ていた私は、スズが真剣にお笑いの批評をしているのを見て、テレビよりむしろスズの批評の行方が気になって仕方なかった。

彼女の判断力は何においても優秀で、聞く側は思わず興味をそそられる。例えお笑い番組の批評だろうとそれは例外ではなく、私はスズの傍でけっこうな時間までそれに付き合っていた。

そうやってスズと過ごす時間は、普通にしていると一向に眠氣が來ない私にとって、丁度いい気晴らしなのだった。

「そうなんだ」。樹本さん運動得意なの？」

運動が得意かどうか。聞かれて悪い訳ではないが、どう見ても並か中のレベルがいいところではしかないのに、一体何が悲しくて日曜に休みをつぶしてまで行かなきゃならないのか。泉先輩が悪い訳では

ないが、一瞬、かなりの割合で憂鬱が私の心を占拠した。

「いいえ全然。上司の誘いで断れなくって」

苦笑いを浮かべた私に、泉先輩は穏やかに言葉を返した。

「大変だねえ。でもまあ、付き合いも大事だから。ウチの会社は行事も多いし、今のうちに慣れておくといいかもしれないよ。もしかしたら駅伝大会のマネージャーとかも回って来るかもしれないし」

そんな物は初耳だ。私は櫛で髪を梳く手をぴたりと止め、つい聞き返していた。

「駅伝大会！？そんなのやるんですか！？」

驚く私に、泉先輩は出来あがった料理を皿に移し、こちらへとやって来て答えた。

「そっだよー。社内の全部の部署が対抗でやるの。練習は来月辺りから。で、本番は秋ね」

泉先輩は説明を続けた。マネージャーは各部の女の子が持ち回りでやっている所も多い。しかも、先輩が見て来た限りでは、私の所属する部署は毎年マネージャー変わっており、恐らく確実に回ってくるだろうとの事だった。

駅伝大会にマネージャー。あからさまに体育会系なイベントと役割回りの存在に、私はちよつと顔をしかめた。

「うー。マネージャーって何やるんですか？」

私の問いに、先輩は「うーん」と少しだけ考えた後、ゆっくり口を開いた。

「仕事は・・・そうだねえ。主に皆のタイムはかったり、ドリンク買って来て差し入れたり？まあ、いわゆる雑用かな」

「うわあ。何だか部活みたい」

思わず驚嘆の声をあげると、先輩は相変わらずのんびりした口調で返した。

「そうだねえ。それに近いものはあるかもしれないなあ。でも、本当の部活よりは全然ましだよ。ウチの部なんて本当に厳しいんだから」

その言葉に、私は先輩がスポーツ特待生として入社したという話を思い出す。

この穏やかな先輩は、こう見えても社内で指折りのアスリートらしい。

「泉先輩、陸上部でしたっけ？」

「そうだよー。陸上。毎日グラウンド10周なんて当たり前だよー。今日だってこれから室内トレーニングなんだから。まあ、好きでやってるからいいんだけどね」

そう言って泉先輩はカラカラと笑った。本当に元気で明るいい人だ。

「あ、せっかくの料理が冷めちゃいますね。すみません、長話しちゃって」

申し訳ない顔で言うと、泉先輩は優しい笑顔を浮かべた。

「いいのいいの。私が話したかっただけなんだから。それより樹本さんこそ時間大丈夫なの？」

気遣うように言われ、私はハッと時間が少ない事を思い出した。

「あつ、忘れてました！あと15分で出ないとヤバイんです」

「あらら。それは話してる場合じゃなかったね。ごめんね、話振っちゃって」

申し訳なさそうな顔になった泉先輩に、私は力いっぱい笑顔を浮かべた。

「いえ、いいんです。先輩と話すのはすごく楽しいですから！」

すると先輩は「ありがとう」と爽やかに笑った。

「じゃ、ミニバレー、頑張ってるね」

「はい、有難うございます」

自室に入る先輩を見送り、私はシャンプードレッサーの前で再び身支度を整え始めたのだった。

A c t ・ 2 日常 (後書き)

【ドロップ】予告編

雨の中、彼女は出会う。

みっともない自分の姿を知る見知らぬ男性と。

それが運命の出会いだと、知る由も無く……。

次回【ドロップ】第一章 A c t ・ 3 「邂逅」かいこう

雨が私を、闇の淵へと、誘う……。

Act・3 邂逅(かいこう)

寮を出た私は、雨の中、傘を差しながら片手で自転車を運転していた。

開始時間まであと10分。目的の市民体育館まで、私の速度なら十分間に合う距離だ。

「うー、冷たい」

降りしきる霧雨の前に、傘はあまり役に立たない。

私は水滴の冷たさを全身に感じながら、懸命に自転車を漕ぐ。どうせじきに着く。少しの我慢だ。

自転車はやがて目的の体育館へと辿り着き、私は自転車を停めた。車体を押しながら中へと進むと、見なれた顔が目に入った。

「おや樹本さん、おはよう。この雨の中自転車で来たの？」

入口の扉の前にいたのは、直属の上司である小林係長だった。

「小林係長、おはようございます。あの、自転車、どこに置けばいいかわかります？」

尋ねた私に、小林係長は笑顔で答えてくれた。

「ああ、確か右手に自転車置き場があったと思うよ」「ありがとうございます」

会釈してその場を後にし、体育館の右手に回る。すると、すぐそこ

に大きな自転車小屋があるのが目に入った。

「よいしょっと」

車輪止めに自転車のタイヤを乗せ、鍵をかける。

「これでよしっと」

入口へ戻りながら時計を見ると、まだ開始まで少し時間があるようだった。

体育館の中にはぞろぞろと人が集まり始めているようだが、別にすぐ中に入る必要もないだろう。

時間まで外で待つ事にしよう。そう思い、私はすぐそばに立っている大きな木の下へ行き、その木肌に手を重ねた。

木は生き物だ。元気がない時に触れると、その生気を分けてくれる。人に言ったら変人扱いされそうだけど、本当にそうなのだ。辛い時に木に触れると、それだけで何だか元気になれる気がする。

木は確かに生きている。雪に覆われた大地の中で、木の周りだけ窪みが出来るのは、木の体温で雪が解けるからだという。聞いた時は半信半疑だったが、実際木の周りだけぽっかりと雪が解けているのを見た時、ああ、本当に木は生きているのだと実感した。

以来私は、苦しい時は木に触れるようになった。木に元気を分けて貰えるように。

こうして木の下にいと、緑と土と水の匂いがいっぱいいて、まるで故郷にいるかのような錯覚に陥る。

私が山を出たのは、あまりにも私の実家が酷過ぎたからであり、私自身は、あの山での生活をこよなく愛していた。

春は新しい草花が芽吹き、夏は陽射しの中で深い緑が輝き、秋は美

しく木々が彩られ、冬は樹氷とダイヤモンドダストが煌めく。

日毎違った表情を見せる山の景色は、何年見ても飽きる事はなかった。子供の時分には、それこそ山での遊びを心底楽しんでいたものだ。晴れには思いっきり野山を駆け回り、雨が降れば草むらに
いるカタツムリを探して回り、雪が降れば雪うさぎや雪だるまを作
って遊んだ。

山の幸にも恵まれていた。春にはフキノトウ、ツクシ、カタクリ、
アイヌネギ。秋には栗、どんぐり、くるみ、落葉きのこ。色んな物
を採って来ては遊びの道具にしたり、食材として料理して貰ったり
したものだ。

故郷の山に思いを馳せ、ふうと小さく溜め息を吐く。それからぼん
やりと空を見上げ、スツと目を閉じた。木の下にいてさえ降り注ぐ
霧の雨は、私の顔を優しく濡らす。

苦い思い出を連れて来る雨は正直好きではなかったが、こうして霧
雨の中にいるのは案外心地よく、雨も悪くないか、などと思った。
その時だった。

「開発技術部の樹本きもとさんですよね？」

ふいに声をかけられ、私は目を開け、そちらを見た。

そこにいたのは、全く見覚えの無い男性だった。

年は多分、私より大分上だろう。がっしりとした男らしい体格に短
く切られた黒髪。手にはグレーのジャケットを持ち、揃いなのだろ
うグレーのパンツに白いシャツ、上品な藍色のネクタイを身に着け、
足元は少しスーツに不似合いな、しかし上質そうな有名スポーツ
ランドのスニーカーを履いていた。

この人は一体何だってこんなところにこんな格好で、しかも私に声
をかけて来たりしたんだらう。第一、何で私の部署を知っているの

か？

「そうですね……」

躊躇ためらいながら答えると、男性は何やら笑いを堪えるような表情で答えた。

「失礼。毎朝凄い勢いで走って行くのを見てたもので」

それを聞いた途端、私の脳裏に毎朝の自分の行動がまざまざと蘇った。

遅刻寸前で、髪を振り乱し、口を開けっぱなしでせえせえ呼吸しながら、一心不乱に全速力で自転車を爆走させている私の姿……。途端に顔が熱くなっていくのを感じ、私は慌てて口を開いた。

「嫌だなあ。あんなところ見られてたなんて恥ずかしい」

すると男性は、赤面する私を前に、いかにも可笑しそうに笑いながら言った。

「あはは。まあ、渋滞してる車から見たら、貴方の自転車の方がよっぽど速いですから」

恥ずかしくしていたたまれない気分になった。この人は多分、私をからかうつもりで声をかけて来たのだ。

そう思った時、私の頭に、思い出したくもない嫌な思い出が次々に蘇った。

幼稚園時代から中学卒業まで、実に10年間に渡って、私は学校中の、主に男子生徒から白い目で見られ、後ろ指を指される生活を送って来た。

それはもう、典型的ないじめだった。幼稚園ではスクールバスの中で小学生男子に口喧嘩を売られるわ、小学校にあがってからは1年生にして高学年の女子数人に呼び出されてトイレで生意気だと脅されるわ、小学2年にしてランドセルをざつくりと切り裂かれて使え物にならなくさせられるわ、ドッジボールでは標的にされるわ、外を歩けば後ろから石が飛んでくるわで、もう散々だった。しかもそれは段々と規模が拡大し、気が付けばもう学校中で知らない人はいないんじゃないかという程に有名な「バイ菌」扱いをされていた。男子生徒数人に取り囲まれて喧嘩を売られる、なんてのはしよつちゆうだったし、学校まで乗って来ていた自転車は毎日のようにタイヤに悪戯され、パンクしていた。

そんな私だから、男子は全部敵のようなものだった。とはいえ、私はそれなりに腕っ節が強かったので、数人でかかって来られても怯む事無く対等に渡りあえていた。あんな毎日で大した怪我也せず、警察沙汰になるような事が全く無かったのは、まさに不幸中の幸いと言えよう。

一事が万事そんな調子の生活だったから、私の中の男に対する印象は最悪で、高校に入っていじめが治まってからも、とてもじゃないが男子生徒と恋愛するなんて考えられなかった。

心の奥底までしっかりと植えつけられた『男は私を迫害する生き物』という意識。それは就職した今でも薄れる事はなく、男性と会話する事はおろか、同じ空間にいるだけでも無意識に身構えてしまう。もうあんな思いはしたくない。それが私を、酷く臆病にさせていた。

そんな私の思いをよそに、目の前の男性は爽やかに笑みを浮かべて言葉を続けた。

「紹介が遅くなりました。私は笹宮ささみや一いち。確か貴方とは同郷ですよ。よろしく」

それを聞いた途端、一気に警戒が解けた。同郷って事はつまり、この一見上品そうな人は、あのド田舎の出身って事だ。何だか一気に親近感が湧き、私は大声で笑いながらバンバン彼の肩を叩いた。

「なあんだ。あんたもあそこの出身なわけ？かしこまった言葉使いしてるから何処の人かと思ったけど」

すると彼は、穏やかな口調から一転して、拗ねた子供のような口調に変わった。

「悪かったな。こつちじゃあやってんのが普通なんだよ」

「悪い悪い。でも、これでおあいこだね」

あんたがさつき私を笑った事は忘れてやってもいい。

そういう意味で、私は自嘲気味な笑いを浮かべながら手を差し出した。

「雨の日に逢ったやつとは、大概いつも、長い付き合いになるんだ。だからきつと、あんたともそうだな」

そんな言葉が口をついて出た。無論そんなのは嘘で、その場の空気ですうたに過ぎないのだが。

「ふうん。まあ、よろしく」

そう言って彼は私の手を握り返した。

これが彼、お兄ちゃんとの、運命の出会いだった。

一つだけ願えるのなら、あの瞬間に戻りたい。
たとえその先の未来が、同じなのだとしても……。

Act・3 邂逅（かいこう）（後書き）

<予告>

再会した彼は、彼女にある提案を持ちかける。
それが持つ意味を、彼女はまだ、知る由も無かった。

次回【ドロップ】第一章「雨の思い出」
Act・4 「約束」

雨が私を、闇の淵へと、誘う……。

A c t ・ 4 約 束

あの雨の日曜日から数日が過ぎたある日のことである。

その日私は、やっぱり朝から降り続く雨を見ながら、深い溜息を吐いていた。

地元では有り得なかったこの梅雨という季節に、なんともやりきれなさを覚える。一体あとどのくらい雨が続くのだろう。考えただけでも憂鬱だ。

私が雨をキライな理由は二つある。一つは、単純に濡れるのが嫌だから。もう一つは、思い出したくも無い嫌な記憶を呼び覚まされるから。

この、雨によって呼び戻される記憶というやつが、なかなか厄介で、私はそれに度々苦しめられているのだ。

まだ小学校低学年だった幼い時分、私は父に恐ろしいまでの暴力を振るわれた。その理由はとても単純で、理不尽な物だった。

『おやつホットケーキをホットプレートで焼いていたから』

たったそれだけの事で、父は機嫌を悪くし、『そんなもの！』と母と私、弟の三人に怒鳴り付けた。父にとっては昼間から電気代を使ってホットプレートでおやつを作っているその行為がいかにも贅沢で許せなかった。そういう事らしい。

当然私は反論した。子供にとってそういうささやかな楽しみを理不尽に叱りつけられても、なぜいけないのか理解など出来よう筈がない。その結果、私は父の更なる怒りを買い、気が付いた時は外に逃げ出す羽目になっていた。降りしきる冷たい雨の中、素足のまま・

結局私は3kmほど先にある民家に住む大人によって保護され、家

へと連れ戻された。あの時の恐怖と絶望感は、10年たった今でも忘れ難いものがある。多分、これが私の雨に関する精神的^{トラウマ}の外傷の原因だと思う。流血沙汰じゃなかっただけ、まだマシというものだが。朝から降り続く雨は、そんな私のトラウマを否応なく刺激した。身体中を鈍い痛みが駆け巡り、私は脂汗を浮かべながら耐えた。結構早い時間に起きていた筈が、朝の身支度が全く進まず、今日も仕方なく濡れるのを覚悟で自転車で出勤する羽目になった。遅刻しそうになりながら、傘を片手に自転車で爆走する。濡れるのはもう仕方ないと割り切つて、とにかく急がなければと全力でペダルを漕いでいた。その時だった。

ププツ！！

後方から響いたクラクションの音に、私は驚き振り返った。そこにいたのは、大きなワゴン車だった。この車種は確か、ハイエース？

車にあまり詳しくない私でも知っているくらい、物凄くメジャーなワゴン車だ。

「こら、傘さして何爆走してんだよ」

運転席から声をかけて来たのは何と、この間のあの彼だった。笑いながらこつちを見ている彼に、私は露骨に顔をしかめた。この状況で声をかけられるなど、迷惑極まりない。こつちは遅刻しそつなのである。話している余裕などないのだ。

「あんたっ！？最悪ー、急いでるのに変なのに会っちゃったよ」

無然としながら言うと、彼はさも心外そつに反論して来た。

「変なのつて、失礼だなー。せつかく乗せてやるうと思つたのに」
「え、ほんと!？」

思わず笑みが零れた。まさか送つて貰えるとは思わなかつた。
この雨降りで、しかも遅刻間際なのだ。その申し出は正直物凄く有
難い。

彼はサツと運転席から降りて来て、私の目の前にやって来たかと思
うと、「ほら、貸せよ」とあつという間に私の自転車をかつさりい、
サツとハイエースの広い後部座席へと積み込んでしまった。

何だか凄く手慣れているように見える。もしかして、いつもこんな
ふうに誰かの自転車を積み込んでるんだろうか。そんな疑問を感じ
た私の前で、彼はスツと助手席の扉を開けると、まるで執事のように
頭を下げ「どうぞお嬢さん」と、中を示して見せた。

その仕草があまりに手慣れて見えて、私は若干戸惑いながら口を開
いた。

「あ、ありがと………」

おずおずと助手席に乗り込むと、彼はサツと扉を閉めた。間もなく
彼が運転席へ乗り込んで来て、車が発進した。

何だか無性に顔が熱くて、うつむいたまま顔をあげられずにいると、
運転中の彼がふいに声をかけて来た。

「お前つて、意外と可愛いのかな」

(か、可愛い!?)

思わずその言葉を反芻した。男の人にそんな事言われたのは、多分
子供の時以来だ。

途端にカーツと熱が増し、耳元まで熱くなるのを感じた私は、それをごまかすように慌てて口を開いた。

「な、何言ってるのよ!? ああ、あたしがわか、可愛いだなんて!」

すると彼はこちらをチラリと見やり、ニヤリと笑みを浮かべた。

「あはは! ばーか。何動揺してんだよ」

「なっ!? か、からかったのね!」

一瞬でも喜んだ自分が堪らなく情けなかった。可愛いなんて事、あの訳ないのに。

蔑まれこそすれ、替辞を受けるなど有り得ない。私にそんな価値など、ある筈がないのだ。

あの10年間で嫌と言うほど思い知っていたのに、ちょっと優しくされたからって、つい油断してしまった。この人も結局、私を蔑み、笑いたかっただけなのだ。

悔しさのあまり、わなわなと身体を震わせながらギロリと睨みつけた私に、彼はぷつと吹き出し、しれっとこんな事を言っていた。

「悪い悪い、お前、からかいがいあるからつい」

腹がたつて仕方ない。大して親しくもない相手に、どうしてこんなふうにかかわれなきゃならないのか。この状況の理不尽さを思い、イライラでおかしくなりそうだった。

ついこの間まで名前も知らない赤の他人だったくせにあんまり失礼なんじゃないの!?

と、一言怒ってやるうと思ったその時だった。

「悪かったよ。お詫びに今度どっか連れてくから」

少しだけ申し訳なさそうな表情を浮かべて言う彼に、私は反射的にこう返事していた。

「ほんと？絶対だからね！」

屈辱的な思いをさせられた埋め合わせは是非ともして貰わねば。半ば意地にも似た感情が芽生えていた。

「ほんとだよ。日曜あたり、どうだ？」

サラリと返って来た返事に、とりあえず自分の予定を頭に思い浮かべてみる。今週末はたしか何も予定は無かった筈だ。

とりあえずYESの返事を返した私は、彼と日曜日に待ち合わせる事となった。

雨の降りしきる、月曜日の事だった。

Act・4 約束 (後書き)

<予告>

交わした約束の真意に悩む彼女に放たれた衝撃の一言。
迫る約束の前に、彼女は何を思うのか？

次回【ドロップ】第一章「雨の思い出」

Act・5 「相談」

雨が私を、闇の淵へと、誘う……。

Act・5 相談

一日の仕事を終え、私は早々に独身寮の自分の部屋へと帰って来た。ふうと小さく息を吐いてベッドにドサリと身を投げ出す。

今日はもう金曜日。明後日には約束の日曜日だ。

「……………どうしようかな」

ぼつり、呟きながら考えを巡らせる。

勢い、というか、流れで約束してしまったのはいいけど、考えてみれば日曜に二人きりで会うなんて、まるっきりデートみたいじゃないか。どうしてあの時気付かなかったんだろう。ちよつと考えれば分かりそうなものなのに……………。

あの時はとにかく腹がたつて、そんな事思いもよらなかつたけど、普通に考えれば、休みの日に男女が二人きりでどこかに出かける。

それってつまり……………。

いや、向こうも別にそういうつもりで言った訳じゃないとは思っけど。

でも、もしそういうつもりだったら？いやいや、そんな馬鹿な。ありえない。あの人はついこの間会ったばかりなのに。しかも、私相手に。

私はお世辞にも可愛い方ではない。加えて、スタイルも良くない。顔は丸顔で、目は一重まぶたでやぼったく、鼻も丸いだけでちつとも整って無いし、胸だつてちっちゃいし、お腹だつてぽっこりのお子様体型だし、化粧だつてしてない。そんな私とデートとか……………。

「ありえないでしょ」

冷静に自分を品評して、まず向こうが異性として意識してる訳がないという結論に至った。
その時だった。

『401号室の樹本沙織さん。お電話が入ってます。受付までお越し下さい』

響いたアナウンスを耳にし、私はむくりと起き上がった。

(電話? 一体誰から?)

疑問に思いながら部屋を出て、寮の玄関口にある受付へと向かう。地元を出て一年になるが、私の個室にはまだ電話を設置していない。だから、外部からの電話は今のようにならぬように寮の受付窓口から取り次いで貰うのだ。

むき出しのコンクリートの外壁に沿って階下へ降り、受付事務所のドアをノックする。

「はい」

優しい声がして扉が開かれ、優しい笑顔を浮かべた初老の男性が顔を出した。

「おお、来たね。電話、藤田さんて女の人からだよ」

私は短くお礼を述べ、招かれるまま室内へと入り受話器を受け取った。

「はい、樹本です」

『沙織？久しぶり。元気だった？』

電話の向こうから明るい声が響く。

「うん。久しぶり〜。あやは？元気してる？」

『もち！元気も元気よ〜。それにしてもアンタ、そっち行ってもう一年でしょ。いい加減個人で電話買いなさいよ〜』

電話の主である【あや】は幼稚園から高校まで一緒に過ごした古い友人の一人だ。地元を出てこっちに来てから殆んど連絡をとらなくなった私に、それでもマメに連絡をして来てくれる数少ない貴重な存在である。

「ごめんごめん。なんか買う機会逃しててさ〜。ちょっと待ってて。公衆電話からかけ直すから」

あやが了解するのを待つて電話を切り、私は管理人のおじさんに礼を述べてから受付を後にした。向かうのは奥の談話室に設置された公衆電話だ。

私はポケットに入れた財布からテレホンカードを取り出し、すぐに公衆電話からあやへと電話をかけた。

『沙織〜、待ってたよん』

コール音きつかり1回ですぐに出たあやに、私は思わず謝った。

「あや〜、ごめんね〜。でも、よくあたしだって分かったね」

『あはは。すぐ分かるって。今時公衆電話からなの沙織くらいだも
ん』

言われてみればそうかもしれない。小学生だって携帯電話を持って
いる時代だ。公衆電話からかける人など滅多にいないだろう。

『ところでどうしたの？何かあった？』

あやの声に心配の色が交る。いつもならあのまま受付事務所の電話
を借りて話すのに、わざわざ公衆電話からかけ直すと言ったからに
は何か理由があるのだろうと察しての事だろう。

「ん、ちょっとね、相談したい事があってさ。いいかな？」

『いいかなとか水くさいな。アンタとあたしの仲でしょ。遠慮
しないで何でも言いなさい』

その口調から受話器越しにドンと胸を張るあやの姿を思い浮かべ、
私は素直に頷いた。

「ん、ありがと。実はね……」

さきほど考えていた日曜の話をあやに打ち明けると、あやはふんふ
んと相槌を打ちながら聞いてくれた。

「あたしはデートなんかじゃないと思ってただけど、あやはどう
思う？」

尋ねた途端、呆れたような声が返って来た。

『沙織、あんたそれ、立派にデートだって。向こうは絶対あんたに気があると見た』

その言葉に、私は信じられない気持ちで反論する。

「いやいやいや、有り得ないでしょ！だって、あたしだよ？普通に考えてそんな色気無いと思うし！！」

どう考えても向こうが私に？そういう関係を求めているとは思えない。そんな私に、あやはきっぱりと言い放った。

『何言ってるの！何とも思って無いならそもそも誘わないってば！！ちよつとは女として自覚しなさい！！』

叱り飛ばされて、思わずうぐんと唸った。

そこまで言われると、さすがに無自覚過ぎたのかもしれないと反省せざるを得ない。

「わかった。ちよつとはそういうふうに見られてるかもって思っとく」

頷くと、あやは満足そうに明るい声を返して来た。

『そうそう。それにあんた、いつまでも男苦手、とか言ってるないで、ちよつとは慣れなさい。いい機会じゃない。その人と恋愛して、ついでに処女も捨てちゃえば？』

「ちよちよつ、ちよつとあや！！！！ああ、あんたいきなり何言ってるの！！！！？」

動揺のあまりどもってしまつ。処女捨てちゃえばって、そんなあつさり!!

『あら。あんたもいい加減彼氏作ってエッチしちゃいなさい。そのままいくとどんどん歳食つて、しまいにはアラサー処女になりかねないわよ?』

あやの衝撃発言にショックを受けながら、とりあえず頑張りなさい、と訳の分からない応援をされて電話を切った。

受話器を置き、ピーピーと音をたてながら出て来たテレホンカードを取りながら、私はすっかり混乱した頭で考えた。

本当に、彼は私をそういう目で見てるんだらうか?

答えの出ない考えに囚われながら、私はその場を後にしたのだった。

Act・5 相談 (後書き)

<予告>

彼女は急ぐ。降り注ぐ雨に傷口が痛んでも。
自分を待つ、彼の元に……。

次回【ドロップ】第一章「雨の思い出」

Act・6 「待ち人」

雨が私を、闇の淵へと、誘う……。

Act・6 待ち人

雨の音が聞こえる……。

叩きつけるような激しい雨音が耳に入り、私は反射的に目を開けた。

「ヤバッ！寝てた!?」

ガバツと身体を起こし、慌てて枕元の小さな目覚まし時計を掴む。
アナログな針は、もうじき10時になる事を示していた。

「寝過ごしたぁああ!!!!!!」

いつの間に寝てたんだろう!?あのまま悩んでたら結局夜が明けて、そのまま起きてようと思ってた筈なのに……!!!
などと後悔している場合ではない。10時に寮近くの駐車場で待ち合わせなのだ。このままだと完璧に遅刻してしまう!!!

私は慌てて身支度を整え、大急ぎで部屋を飛び出した。バタバタと階下へ降り、正面玄関へと向かう。

「いつてきます!!!!!!」

受付のおじさんに勢い良く挨拶して、玄関にある自分のネームプレートをひっくり返した。

「おお、出かけるのかい?外雨だよ?傘は?」

「時間ないんです!いつてきます!!!」

外へと飛び出す。途端に冷たい滴が身体を濡らした。

嫌な記憶が頭を駆け巡り、鈍い痛みが体中に走る。

思わず怯みそうになったが、ここで引き返す訳にはいかない。彼が待っているのだ。

私は止まりかけた足を懸命に動かし、自転車置き場へと走りだした。早く早く！！気持ち焦る。

目的の自転車置き場に辿り着くと、急いで自転車の鍵を開けて自転車小屋から車体を出し、サドルにまたがった。

腕時計を見ると、もう10時まで1分もなかった。私は懸命にペダルを漕ぎ、待ち合わせ場所へと急ぐ。遅刻は確定だけど、一刻でも早く着きたかった。

やがてガランとした駐車場に、ポツンと止められたハイエースワゴンが見えて来た。傍らには、傘を差した男性が立っている。

私はペダルを漕ぐ足に一層力を込め、そこへと急いだ。彼の真横まで来たところでブレーキをかけ、自転車を停めた。

はあはあと息を切らしながら彼を見ると、その目が驚きで目を見開かれた。

「お前っ！この雨の中自転車って何考えてんだ！？」

「あは・・・は。ちょっと、寝坊しちゃって・・・。待たせちゃ・・・悪いと・・・思っつて、急いで・・・来たん・・・だけど」

息を切らせ、途切れ途切れ話しながら自転車を降りると、サッと傘が差し出された。

「アホ！風邪ひいたらどうすんだ！まったく・・・」

「アホは酷いなあ。せっかく一生懸命走って来たのにさ」

思わず苦笑いを浮かべると、彼はなんだか複雑な表情でこちらを見

ていた。心なしか頬が赤いような……。

「ほら、とつとと貸せ。積んでやるから」

そう言ってサツと自転車を奪い取り、あっという間に後部座席に積み込んでしまった。

それからおもむろに助手席のドアを開け、不機嫌そうに言い放った。

「何してんだよ、早く乗れ」

「ん、ありがと」

短くお礼を言い、助手席へと乗り込む。座席濡れちやいそうだけど、この際仕方ないだろう。ここで拒んだら、それこそ彼に悪い気がする。

シートベルトを締めていると、彼が運転席に乗り込んできてシートベルトを締め、おもむろに車を発進させた。

彼はチラリとこちらを見やり、それからなんだか慌てたように前に向き直って口を開いた。

「とりあえずお前、その格好何とかしろ。ずぶ濡れじゃ風邪ひくだろう」

その様子に違和感を感じながら、まあいいかと思考を切り替える。そんな事より、今はこの格好をどうするかだ。何とかしろと言われども、待ち合わせに遅れた上に着替えに帰るのはさすがに気が引ける。

「んー、いいよ。着替えに帰る時間勿体ないじゃない？」

私の返答に、彼は少し考えるように黙り込んでから口を開いた。

「……………なら、俺の部屋来いよ。風呂と着替え貸してやるから」

その提案に、少しだけ考えた。着替えに帰って待たせておくのは申し訳ないが、このままでいるのはたしかにちょっと気持ち悪い。ここは好意に甘えておくのもいいかもしれない。

「ホント？じゃあそうしようかな」

思い切ってそう返答すると、彼はすっかり前を見たまま答えた。

「おう。じゃあ決まりな。狭い部屋だけど、我慢しろよ？」

弟以外の異性の部屋に入るのなんて、小学生以来だけど。まあ、深い意味はないんだし、そんなに気にする事もないだろう。そんなふうに軽く考えていた。

“それ”が示す意味など想像もせずに……………。

Act・6 待ち人 (後書き)

<予告>

彼女は笑う。悲しい記憶に支配されぬよう。
例えそれが、強がりであっても……。

次回【ドロップ】第一章「雨の思い出」

Act・7 「偽りの笑顔」

雨が私を、闇の淵へと、誘う……。

Act・7 偽りの笑顔

雨の日曜の道路はさほど混んでおらず、スムーズに進んでいく。私は彼に渡されたタオルで頭を拭きながら、ちらりと彼を見やり尋ねた。

「ねえ、部屋って遠いの？」

「ん？そつだな。ここから15分くらいかな」

こちらを見ず、まっすぐに前をみつめたまま返って来た答えに、私は適当な相槌を打った。

外には相変わらずどしゃぶりの雨が降りしきっている。この視界の悪さでは、運転も大変なのかもしれない。

「そつか。それにしても雨、凄いな」

呟くように言うと、彼の口から小さな溜め息が漏れた。

「そつだな。梅雨って言ってもたまにこういう激しいやつも来るかな」

その顔に憂鬱な色が浮かぶ。私は何となく気まずくて、つとめて明るい声を出した。

「そついや、あつちは梅雨ってないもんね。話には聞いてたけど、本当に雨ばかりでちよつとびっくりした。アンタはもう慣れた？」

私達の故郷には、日本では一般的な梅雨という時期が無い。鬱陶し

い雨降りの時期が無いのは有難いが、その代わり、冬にはこちらでは考えられないような量の雪が降り積もる。それもまた、私がこちらに出ようと思った理由の一つだった。

「まあな。でも鬱陶しい事に変わりはないけど。洗濯物乾かないしな」

「あ、そうそう！困るよねー。じめじめじめしてさー」

思わず声が弾む。ぶつきらぼうにでも、同意して貰えたのが嬉しかった。

「だな。まあ、それでもあっちにいるより生活は便利だからいいんだけどさ」

先程より随分柔らかい声が返って来た事に安堵する。良かった。話しかけても大丈夫のようだ。

「だよな。あっちって本当に田舎だもん」

私の頭に、かつて毎日過ごした住み慣れた田舎の風景が蘇る。

見渡す限りの山と水田。隣の民家まで1kmはあろうかという、恐ろしくさびれた農村地区。

山の中特有の、濃密な自然の空気。水と土と草の匂いが懐かしくて、思わず目を細めた。

帰りたいな。山に……。

“あんな家”でさえなければ、私はあそこを出ようなんて思わなかったのに……。

「なあ、お前さ、帰りたくなることってあるか？」

ふいな問いかけに、私は一瞬黙り込み、それからゆっくり口を開いた。

「・・・そうだね。山には、帰りたいたいと思うよ。でも、家に帰りたいとは思えない」

“あそこ”には帰れない。変えようの無い現実が、苦しかった。

「そっか。まあ、そうだよな。田舎だし」

静かに返された声を聞きながら、私はうつむき、ギュッと拳を握った。

叩きつけるような雨音がうるさいくらい耳につき、全身に鈍い痛みが走った。

大丈夫。大丈夫。すぐ、治まる・・・。

いつもの“発作”に、唇を噛んで耐えていたその時だった。

急に車内が暗くなり、雨音が途切れた。車がトンネルに入ったのだ。

良かった・・・。

痛みが消えた。そういえば、今朝はバタバタして薬を飲めなかった。だから“発作”が起きたのかもしれない。

やがて車はトンネルを抜け、車内は再び叩きつける雨の音に支配された。

私はふいにある事を思い付き、口を開いた。

「ね、そういえばさ、アンタ、一人暮らし？」

唐突に尋ねた私に、彼は驚くでもなく、ごく普通に答えた。

「ん？そうだけど」

私は思わず手を叩き、はしゃいだ声で言った。

「じゃあ決まり！あのさ、あたし、料理作ってあげる！」

「はあ！？料理？」

驚きの声をあげた彼に、私はにっこり笑った。

「せっかく友達の家に行くんだもん。何か作ってあげる！こう見えても料理得意なんだからね！」

本当は何でも良かった。“あの記憶”を遠ざけられるなら、何でもだから私は、とりあえず今日の前にいる、一人暮らしで寂しい食生活を送っているだろう男友達の為に料理をふるまうという素敵なプランで頭をいっぱいにする事にしたのだ。そうすれば、余計な事を考えなくて済むから。

「わかったわかった。じゃあ、作ってもらおう事にする」

半ば呆れたように了承してくれた彼に、ちょっとだけ悪いなと思いつつ笑顔を作った。

「楽しみにしててね！」

そう言って、笑った。

泣くよりも、笑う方がいい。少なくとも、彼の前では。
気を抜くとまた悲しい記憶に支配されそうで、私は一層無邪気に笑った。

チクリ。胸を刺す痛みを、見ないフリして……。

Act・7 偽りの笑顔（後書き）

<予告>

異性から受ける当たり前の優しさ。

それは彼女に、新鮮な驚きをまた一つ与えてくれる。

次回【ドロップ】第一章「雨の思い出」

Act・8 「戸惑い」

雨が私を、闇の淵へと、誘う……。

Act・8 戸惑い

私達は高速道路近くにある大型スーパーへとやって来た。雨はもう小降りになっていて、あれから発作が起きる事もなく安心していた。

「おい、傘！」

車を降りて走りだした私に、彼がビニール傘片手に叫んだ。

「いいよ別に。もう濡れてんだし。それより早く行こ！」

このくらいの小雨なら、別に傘がなくなたって構わないだろう。そう思い、そのまま店に走って入った。大した距離でもないのにちよっと息があがっているのがちよっと情けない。運動不足だなあ、私。などと思いつながら買い物カゴを手にした。店内には明るい音楽がかかっていて、なんだか気持が明るくなるよくな気がした。

さすが大型スーパーだけあって品揃えが良さそうだ。まずはすぐ傍にある野菜コーナーから見て行こうかなと思い、ざっと目を通す。

「うーん……」

積みまれたじゃがいもの袋を手に、思案しているところへ彼がやって来た。

「あ、ねえねえ、ポテトサラダ好き？」

「ポテトサラダ？ああ、嫌いじゃないけど」

「じゃ、決まり」

これで付け合わせはポテトサラダに決定だ。

「あとは玉ねぎと・・・」

私はざっと野菜コーナーを見まわし、玉ねぎの積まれたコーナーを発見して歩み寄る。

山と積まれた1個35円、3個100円の玉ねぎを、1つ1つ手にとってみる。こういうのは実際手にとって見ないとわからないものだというのが私の野菜選びの信条なのだ。

「うーん、こっちよりこっちの方がいいかな・・・」

などと吟味していると、彼が隣で呟いた。

「お前、意外と主婦くさいのな」

「ふふん。こう見えてもあたし、小学生の時から家事してんのよ。底値だつて研究してんだから」

母さんが昔からよく入院してたから、料理洗濯は自分達で出来て当たり前だった。お陰で家を出てからも大して困ってはいない。人生何が吉と出るか分からないものだ。

「あ、でも料理洗濯だけよ。掃除はすごい苦手だから」

実家のあの惨状の中で普通に暮らしていたのだ。多分、片付けるといふ能力そのものが、普通の人と比べたらビックリするくらい低い

に違いない。今はまだ部屋に物がほとんどないから目立たないけど・
・・・。

「ふうん」

何だか妙に納得したような顔をされている。この人、一体私にどんなイメージ抱いてるの？と、ちょっと疑問に思いつつ聞き流した。ろくでもないイメージだったら落ち込みそうだし。

「うん、これとこれとこれ！」

とりあえず、目の前の山から玉ねぎ3つを選び出してビニール袋に入れ、カゴに放り込んだ。

「さて、次は三つ葉と」

確か、あっちの方にあった筈……。

ざっと見た時にあった方向を目指すと、すぐに目的の三つ葉が見つかった。

そのままポイントとビニールに包まれた三つ葉をカゴに放り込む。

「あ、三つ葉大丈夫？」

人によっては苦いの嫌、とか匂いがダメ、とかいう事もあるから、一応聞いておかないかと思ひ尋ねた。

「ああ、別に平気」

「そう。良かった。じゃあ、なめこは？」

今作ろうと思ってるメニューにはやっぱりなめこがあった方がいいんだけど……。

「それも平気。むしろ好物だな」

彼の返答を聞いてホツとした私は、そのまま近くにあるキノコ売り場へ歩いていき、そこに積まれたなめこの袋の一つをカゴに放り込んだ。さて、後は……。

「それじゃ、次は肉ね肉!!」

メニューが定まって来て喜びいさんで肉売り場を目指そうと思っていると、唐突に横から買い物カゴを奪われた。

「あ……」

「ごうごうの、男が持つもんだろ」

サラッとと言われて、思わず頬が熱くなるのを感じた。ごうごうって女の子扱いされるのって、何だか照れる……。

「……ありがとう」

ぼそつと呟くと、彼はスツと前を歩き出した。

「さ、肉コーナーはあっちだ。行くぞ」

男の人の足つて、早い!!

ちよつとぼんやりしてただけであつという間に置いて行かれてしまった。

「あ、待ってよ」

私は慌ててその後ろ姿を追いかけたが、なかなか差が縮まらない。

「ねー、待ってってば!」

スタスタ先に行く彼に向かって叫んだ。

「ねえってば!」

何とか追いついた私は、思わず後ろから彼のシャツを掴んだ。

「足、速い!!」

「掴むな!シャツ伸びる!!」

そう言われても、追いつくので精一杯だったんだから仕方ない。

「えー、だってアンタ、止まってくれないんだもん」

抗議の意味で口を尖らす私に、彼は大袈裟に溜め息を吐いた。

「悪かったよ。ほら、肉売り場、ここだから」

見ると、ショーケースに肉がズラリと並んでいた。どうやら量り売りのようである。

「肉、どれをどのくらい使うんだ?」

「鶏モモ肉。300gくらいかな」

答えると、彼はすぐにショーケースの向こうにいる店員さんに注文してくれた。

肉がビニールに入れて計られ、値札を付けて渡されたそれを彼が力ゴへ放り込んだ。

「これでいいか？後は？」

問われて、私は必要な物を思い返し、答えた。

彼はそのまま力ゴを持ったままスーパー内を案内してくれ、私は彼の部屋に何があるか聞いて、足りないだろう物を着々と買い揃えていく。

だしパックに調味料、おひとり様一パック77円の卵に、魚肉ソーセージも買ったし、後はお会計しても大丈夫だろう。

レジに並んで会計するところで財布を出そうとすると、彼が手で制止した。

「これくらい俺が出すからいいよ」

「え、でも……」

躊躇う私に、彼はにっこり笑った。

「ばあか。作ってもらったからこれくらい出させる」

その悪戯っぽい笑顔に、また頬が熱くなるのを感じて、私はうつむきながら呟いた。

「あ、ありがと……」

何だか急に自分が女の子扱いされてる感じがして照れくさい。
昔はこんな事、絶対考えられなかったのに……。
戸惑いながらも嬉しく思うのだった。

Act・8〜戸惑い〜(後書き)

<予告>

辿り着いたその場所。

彼の領域で、彼女は何を思うのか。

次回【ドロップ】

第一章「雨の思い出」

Act・9〜見知らぬ部屋〜

雨が私を、闇の淵へと、誘う……。

Act・9（見知らぬ部屋）

買い物を終えた私達は、ビニール袋を手に店の入り口へと戻って来た。

といつても、食材が沢山入って重いだろうそれは、彼が全て持ってくれたので、私の手持ちは自分のバッグだけだった。

外はまだ雨が降っていて、ちよつと憂鬱な気分になったその時だった。

「走るぞ！」

両手に袋を提げた彼が、車に向かって走り出した。

「あ、待ってよ！」

慌てて後を追いかけるが、とても追いつけない。あれだけ荷物持ってるのに、凄い早さだ。

彼はあつという間に車に辿り着き、さつさと後部座席に荷物を積み込んでいた。

「はあはあ……。足、速いね」

必死で走り、息を切らせながら車まで辿り着いた私を見て、彼は皮肉っぽい笑みを浮かべた。

「お前、自転車はあんなに早いのに足は遅いんだな」

「ひどいなあ。まあ、事実だからしょうがないけど」

小さく溜め息を吐き、助手席へと乗り込んでシートベルトを締めた。元々私は運動が得意ではない。自転車が速いのは環境上必然だっただけで、別に好きで鍛錬していた訳ではないし。などと思っていると、彼が運転席に乗り込んで来た。

「じゃ、行くか」

にっこり笑い、彼はシートベルトを締め、再び車を発進させた。やがてハイウェイ高架下にある小さな二階建てのマンションが見えて来て、車はその駐車場へと滑り込んだ。

「着いたよ」

車を止め、運転席から降りた彼は、私が車を降りる間に後部座席に回り、積んだビニール袋をサツと取り出していた。

「あ、片方持つよ」

慌てて声をかけたが、「いいから」と断られ、さつさと歩きだされてしまった。

何だか悪いなと思いつつ、慌てて後を追いかけて声をかけた。

「けっこういいマンションね。新しいんじゃない？」

汚れの無い綺麗な外壁に綺麗なドア。ぱっと見では新築のようにも思えるのだが。

「んー、それほどでもないよ。不動産屋は築3年って言ってた」

私の疑問に答えながら、彼はカンカンと鉄製の階段を昇り、二階の

真ん中にある部屋の前で足を止めた。

彼はビニール袋を提げたまま、手に持った鍵束にある鍵の一つをドアの鍵穴に差し込む。

ガチャリと音をたてて鍵が回り、ドアが開かれた。

「どうぞ。狭いし散らかってるけど」

「ありがと。お邪魔します」

促されて中に入ると、彼も入って来て扉に鍵がかけられた。

(鍵?何で?あ、でも普通の家は防犯にかけるモンなのかな?)

何しろ実家は田舎だったので、鍵をかけるという習慣がなかった。一般的な家庭では帰ったら鍵をかける、というのは普通なのかもしれない。などと考えていると、彼が玄関の先を指して口を開いた。

「ほら。狭いんだから遠慮しないで早くあがってよ」

「あ、うん……」

私はおそろおそろ靴を脱ぎ、室内へと足を踏み入れる。フローリングの狭い廊下だ。

彼も続いて廊下にあがり、スタスタと先に行く。

「そのドア開けて中入って。コレ、冷蔵庫にしまっちゃうから」

突き当りのドアを示され、私は頷きそこへと向かった。

ドアを開けると、そこはフローリングの部屋だった。広さは6畳くらいだろうか。下にハンガースペースがある高いパイプベッドに、

テレビ、小さなテーブル、クッション、衣装ケースなどが置かれている。窓際には室内用物干しが設置され、タオルが干されている。大きな窓はベランダへ繋がっており、物干し竿があるのが見える。

「適当にくつろいでて」

その声をかけられ、扉が閉められ、私はとりあえず手近にあったクッションに座った。

一人残された見知らぬ部屋は、あまり物が無いせいかとても無機質に感じられ、何だか全然落ち付かない。

外からはガサガサとビニール袋の音が聞こえている。さっき言ったように食材をしまっているのだろう。

やがてその音が止み、扉が開く音が聞こえ、ジャバジャバと水音が聞こえ始めた。

「お待たせ。今風呂にお湯はってるから、もう少し待ってる」

部屋へと入って来た彼に、私は少しだけ戸惑いながら微笑んだ。

「ありがと。いい部屋だね」

「そうか？まあ、何にもないけど、とりあえずテレビでも見る？」

そう言ってテレビの手前に置かれたテーブルへと歩き、そこに置かれたリモコンを操作してテレビをつけた。

賑やかなテレビの音が響き出し、さっきまで静かで無機質だった空間が、あつという間に生活感溢れる空間に変わった。

「あ、そうだ。お湯がたまるまで、とりあえずタオルで身体拭いて着替えてきたら？ほら、これ貸すから」

彼は衣装ケースからTシャツとジャージを取り出すと、室内に干してあったタオルと一緒に手渡してくれた。

「玄関からすぐ右手の扉開ければ洗面所だから、そこで着替えなよ。濡れた服とタオルは、とりあえず脱衣籠に入れておいていいからさ」

「あ、ありがとう……」

私は躊躇いがちにそれを受け取り、さつき入って来た部屋の扉を開け、教えられた洗面所へと向かった。

そこはシャンプードレッサーのついた綺麗な洗面所で、大きな白い洗濯機があり、その上に脱衣籠が置かれていた。

（なんか、凄い……）

人様の家に遊びに行った事はあるが、こんな綺麗な洗面所なんて見た事が無い。

そもそもシャンプードレッサー自体、寮に入って初めて目にしたのだ。よく遊びに行っていた地元の友達の家でも、そんな物が設置されたお宅は一軒も無かった。もしかしたら、単に私の地元が田舎すぎるだけなのかもしれないが。

それにしても、いい設備だと思う。さつき玄関から入ってすぐの所にあつた台所もそうだ。シンクはピカピカだし、給湯器らしき物もついていた。玄関だって、大きな下駄箱らしきものがあつたし。

（大変じゃないのかな？）

1部屋しかないあたり、単身のマンションなのだろうが、これだけいい部屋となると、家賃も相当高そうだ。彼がどれくらい給料を

貰ってるのか分からないが、一人暮らしは色々物入りだ。それは寮に入っている私自身感じている事であり、ましてや外で部屋を借りるとなれば、相応の生活費がいる事になるのは想像に難しく無い。まあ、人様の懐事情を気にしたところで、私にどう出来るという訳でもないが。まさか「生活大丈夫？」なんて失礼な事をいきなり聞く訳にもいかないし、仮にそうだったとして、私に出来る事と言えば、自炊が大変だろうから食事を作ってあげる、くらいだろう。幸い今日は食事を作ると申し出ている。作り置きが利く物も作っておいてあげればきっと助かるだろう。などと考えつつ、私は着替えをすませ、元いた部屋へと戻った。

「着替え、ありがと」

ゆったりしすぎなくらいの大きめなTシャツとジャージを着た私を見て、彼は苦笑いを浮かべた。

「やっぱり俺のだとでかいな」

「ん、そうだね。でもいいよ。小さいより大きい方が楽し」

照れ笑いを浮かべた私に、彼が虚をつかれたように黙り込んだ。

「どうしたの？」

「あ、いや、何でもない」

「そう？あ、そうだ。お風呂のお湯たまるまで時間あるよね。その間に料理やっちゃうね。台所、借りるよ」

とりあえず、まずは料理を作ってしまうおうと思いい、扉を開け、台所

へと向かった。直後、ハタと思い立って部屋の前に戻り扉を開けた。

「ねえ、包丁とか鍋とかってどこにしまってるの？」

「ああ、ちょっと待って」

台所に出て来た彼は、一通りのキッチン用品、調味料の場所を教え
てくれ、冷蔵庫の中身も適当に使っていいからと言って部屋に戻っ
て行った。

残された私は腕まくりし、いよいよ料理を始めたのだった。

Act・9 見知らぬ部屋 (後書き)

<予告>

感じる違和感。戸惑い。

その先に、何が待ち受けているのか。

次回【ドロップ】

第一章「雨の思い出」

Act・10 動揺

雨が私を、闇の淵へと、誘う……。

Act・10 動揺

とりあえず下準備からだ。私は鍋に水を入れ、コンロにかけた。

それからじゃがいもに手を伸ばし、包丁で皮を剥く剥いて行く。あらかた剥き終わったところでハタと気付き、元いた部屋の扉を開けた。

「ねえ、電子レンジ対応の耐熱皿ある？」

ドアから顔を出して尋ねると、何やら固まった様子の彼の顔が目に入った。

「ん？どうしたの？」

何かあったのかと思って聞くと、彼はハツとしたようにいつもの表情に戻った。

それからおもむろに立ち上がり、台所へとやって来て目的の食器の在り処を教えてください、そのまま何事も無かったかのように部屋に戻って行った。

(どうしたんだろ?)

何でもないように振る舞ってはいたけど、やっぱり何処がおかしいような気がする。

疑問に思いながら調理を再開した。

彼が何も言わないのに、私がこれ以上しつこく尋ねるのも躊躇われた。

いくら同郷とはいえ、私と彼はこの間会ったばかりの知り合いに過ぎない。立ち入った事を聞く権利などないだろう。

今私に出来るのは、せめて美味しいご飯を作ってあげる事くらいだ。そう思い、せっせと調理を続けた。やがて料理は完成に近付き、後は鍋に仕込んだ物に味が染み込むのを待つばかりだ。

とりあえず、鍋を弱火で火にかけたまま一旦部屋に戻る事にした。

「お、もう出来たの？」

「ん、まだ。今煮込んでから、味染みるまで一休み」

「そっか。あ、ちょっとそこ座って待つて。風呂見て来る」

私に目の前のクッションへ座るよう促し、彼は部屋を出て行った。

その様子はすっかり元の彼で、私はホッと胸を撫でおろした。

もし何かあったのだとしても、そんなに大した事じゃないのかもしれない。

「お待たせ。もう入れるよ」

と言われても、まだ火にかけている物があるし、すぐにお風呂という訳にはいかない。

私はとりあえず一言断りをいれ、先に料理を完成させてしまう事にした。

「出来たよ。ご飯よそつてくれる？」

井を手に呼びかけた私に、彼の疑問顔が向けられた。

「あれ？一つだけ？お前のは？」

「あたしはお風呂入るから、その間に食べてもらおうと思って」

「そうか。わかった。じゃあ、お言葉に甘えるよ」

彼が井にご飯をよそっている間、私は他の料理を運ぶ事にした。

「運ぶのってそのテーブルでいいの？」

「ああ、そこ置いて」

テレビ前に置かれた小さなテーブルに、ガラスの器に盛られたポテトサラダと、木の器に入ったみそ汁を置いた。

「へー、けっこう美味しそうだな」

井を手に戻って来た彼に、私はにっこり笑って言った。

「ふふーん。あ、井貸して。具入れて来るから」

彼の手からご飯の入った井を受け取った私は、台所に戻ってフライパンの中に入った物をご飯の上に盛り付けて戻った。

「おお、親子丼か」

「そうだよ。ふふふ。けっこう自信作なんだから。見てよこの半熟具合」

井を動かすと、中に入った卵がぶるぶると揺れる。仕上げに入れた三つ葉もいい感じに出来たし。自分で言うのもなんだけど、見た目は寮の近くの食堂で出している親子丼にかなり近く出来たと思う。

「うん、見た目はスゴイ美味そうだ。味はどうか？」

「あはは。食べて驚きなさい。あたしはお風呂入って来るから」

「おう。入って来い。タオル、これ使つていいから」

室内に干されていた白い大きなバスタオルを手渡された。

「ありがとう。じゃあお風呂借りるね」

部屋に彼を残し、私はいそいそと風呂場へ向かい、服を脱いで浴室へと入った。

男の人の部屋でお風呂を借りるなんて初めての事で、ちよつと緊張してしまふ。

意識するような関係じゃないんだから、緊張する必要なんてないとは思っただけど……。

『あんたもいい加減彼氏作つてエッチしちやいなさい』

ふいによぎつたあやの言葉に、カーツと顔が熱くなった。

(や、違つつて！彼とはそんなんじゃないんだから！！！！)

余計な考えを振り切るようにザーツとシャワーを浴び、身体を洗い始めた。

それでも一度よぎつたあの言葉はなかなか頭から離れず、私は動揺する気持ちをごまかすように、頭から足の先までゴシゴシと入念に洗い続けるのだった。

Act・10〜動揺〜（後書き）

<予告>

褪せない記憶。消えない傷。

雨が誘う闇に、抗う術は無いのか。

次回【ドロップ】

第一章「雨の思い出」

Act・11〜痛み〜

雨が私を、闇の淵へと、誘う……。。

A c t ・ 1 1 痛み

お風呂をあがった私は、再び彼のいる部屋へと戻った。

テレビの消された室内は、先程より更に激しくなった雨の音がやけに耳に付く。

私は思わず耳を塞ぎたい衝動に駆られながら、それでも何とか笑顔を浮かべ彼を見やった。

「お風呂ありがとうね」

礼を述べてから、料理の味が気になり尋ねてみると、優しい笑顔が返って来た。

「おう。美味かった。お前、意外と料理上手いな」

「そう？なら、いいんだけど・・・」

彼の穏やかな声に、私は気の無い返事を返した。

雨の音が耳について仕方ない。嫌な記憶が頭によぎり、全身に鈍い痛みが走る。

嫌だ、やめて！思い出したくない！！

振り切ろうとしても、記憶はその鮮明さを増すばかりで、痛みがどんどん酷くなっていく。

「ん？どうした？」

思わず彼を見ると、心配そうな顔が目に入った。

「え？」

「え、じゃないだろ。何でそんな顔してんだ？」

彼の問いかけに、私は全身を走る痛みを堪え、何とか笑顔を作った。言った。

「何でもない。それより、作ってあげたんだから、当然後片付けはあんたがやってくれるのよね？」

すると彼は、訝しげな顔をしながら、それでも何も聞かず頷いてくれた。

「仕方ないな。まあ、洗い物は得意だし、やってあげてもいいぞ」

得意気に胸を張る彼に、思わず頬が緩んだ。

瞬間、さつきまであった痛みがスツと消えてくれた。

私は胸を撫でおろし、笑いながら彼に洗い物を頼む事にした。

キッチンへ消えて行く彼の後ろ姿を見送った後、タオルで頭を拭きながらハタと思立ち扉の向こうを覗いた。

「ねえ、ドライヤー借りていい？」

「ああ。ちょっと待って」

洗い物の泡でいっぱいになった手を水で流し、彼は室内に戻って来てドライヤーを渡してくれた。

「ほいこれ。あ、コンセントはそこな」

部屋の一角に見えるタコ足配線が示され、私は短くお礼を述べた。ドライヤーを使い始めると、彼は私をその場に残してキッチンへ戻って行った。

それからすっかり髪が濡れた頃、ちょうど洗い物を終えたらしい彼に声をかけた。

「これ、ありがとね。アンタもお風呂入って来たら？さっきちよつと雨に濡れてたでしょ？早めにあつたまっという方がいいよ。風邪ひくから」

「そうだな。じゃあ俺も入って来るか。あ、お前はテレビでも見てくつろいでてくれよ」

笑顔で言われ、私はとりあえずリモコンを操作してテレビを点けた。そうして彼が部屋を出て行くと、また激しい雨の音が耳につくようになってしまった。

思わずテレビの音量をあげてみたが、それでも雨の音は消えてくれない。

嫌だ。やめて……!!

酷く耳障りな雨の音がうるさく響く。頭の中に、さっきと同じ嫌な記憶がまた溢れ出し、体中を鈍い痛みが支配していく。

「はあはあ……!!」

息が荒くなる。どんどん痛みが強くなり、もうその場に座っている事さえ辛い。

私は思わずその場に身体を横たえ、身をよじりながら痛みに耐えた。

いつもなら薬を使うのに、今日はそれも持っていない。

私は必死で痛みを抗い、なんとかテレビのモコンへと手を伸ばした。音量をあげれば、この雨の音から逃げられるかもしれない。そう思ったのだが、視界がぼんやり滲んで、何がどのボタンなのかさえよく分からない。

「あっ……！！！」

適当にボタンを押すと、テレビが消えてしまった。

テレビの音が消えた室内には、一層強く雨の音が響き始めた。

「うっ！あっ……！！！」

思わず声が漏れた。痛みが遠くなり、私は思わずギュツと目を閉じ、歯を食いしばった。

じき彼が風呂からあがって来るだろう。こんな姿、見せる訳にはいかない！

落ちつけ！大丈夫！大丈夫だから……！！

言い聞かせながら、必死で深呼吸を繰り返す。

そうしている内に、なんとか痛みが遠のいて来た。

「ふう……」

まだ少し辛いけど、何とか発作は治まったようだ。

安堵の息を漏らし、私は手足を床に投げ出したまま天井を見つめた。

（一体いつまで、こんな思いしなくちゃいけないんだ……）

雨が降る度、私はこうやって何度も何度も同じ痛みを味わうのか。いつそ死んでしまえば楽になれるのに。そんな考えがよぎる。私が死んでも、あの父は自分の所為^{せい}だなんて絶対思わないだろうけど。

溜め息を吐く気にすらなれず、私はただぼんやりと天井を見つめ続けるのだった。

Act・11～痛み～（後書き）

<予告>

偽りの関係でもいい。

想う心が、笑顔を与える。

次回【ドロップ】

第一章「雨の思い出」

Act・12～兄妹～

雨が私を、闇の淵へと、誘う……。。

Act・12 兄妹

やがて部屋の扉が開く音が響き、彼が中へ入って来る気配がした。窓に叩きつける雨の音だけがやけに大きく響く中、彼の声が静かに聞こえた。

「寝てる……のか？」

酷く躊躇いがちな彼の声に、私はそちらを見もせずに答えた。

「ううん……起きてる……」

何の感情も無く、ただ無機質に答えると、ふいに顔を覗きこまれた。

「……!」

私を見つめる彼の顔に、驚愕の色が浮かんでいるのが見える。

「お前……どうしたんだよ、一体!？」

「別に……。ちょっと、思い出しただけ」

溜め息すら吐く気になれず無機質に答えた私を、彼は訝しげに見つめた。

「思い出した？何をだ？」

「言えない……」

あんなろくでもない嫌な話、この彼に出来る訳がない。

「……何で、そんな……。俺、何かしたか？」

「違う。ただ、思い出しちゃうただけ。あるでしょ、そういう、どうしようもない時って」

彼が悪い訳ではない。ただ雨が、？あの記憶 が、私を簡単に打ちのめしてしまうだけだ。

「……そうか。でも、俺の前でそんな顔するな。どうにかしたくなる」

「……そう。ごめん。今は、どうしようもない……」

まるで自分の方が痛いみたいな顔で言う彼に、私は何の感情も抱けず、ただ無機質に答えた。途端、彼が私の上に覆いかぶさって来た。

「……襲うよ？」

真剣な顔が、そこにあった。その表情に、冷たく凍りついていた私の心が、ほんの少しだけ動いた。

「あなたはそんな事しないわ。友達だもの……ね」

「信用……してるんだ？」

静かな問いに、私はきっぱり「ええ」と答えた。

彼は“そういう類”の人間ではない。そんな確信があった。

「……悪い。ちよつと、外す」

そう言つて彼が部屋を出て行き、私はようやく我に返つた。

「あ………」

さつきまで自分が何を考えていたのか思い出しゾツとした。

今さつきまで、私は“死んでしまえばいい”と思つていた。楽になりたかつた。私が死んでも、誰も悲しみなんかしない。そんなふうに思つた。揚句、心配してくれた彼を拒絶した。

激しい後悔に駆られ、私はすぐに身体を起こし、彼を追つて部屋を出た。けれど部屋の外の廊下に彼の姿は無く、ただ静かにシャワーの音だけが響いていた。浴室の扉を見やり、私は小さく溜め息を吐いた。

あんな態度で、きつと傷付けたに違いない。後悔に胸を痛ませながら、私は部屋へ戻つた。窓に手をつき、もう一度溜め息を吐く。

やつてしまったものは仕方ないけど、せめて謝らないと。そう思いながら待っていると、やがて彼が戻つて来た。

「もう大丈夫なのか？」

心配そうな問いかけに、私は何だか泣きたい衝動に駆られ、何とかそれを堪えて笑つた。

「ん、ごめん。心配かけたね」

「そつか。あんまり無理、すんなよ」

くしゃり。

彼の大きな手に頭を撫でられ、私は思わずその腕を掴んだ。

「ちよっ……子供じゃないんだから」

「はは。子供だよ、お前は」

彼の笑顔に、思わず力が抜け、するりと手が落ちた。

ダメ。ダメだよ……。

堪えようとしたが、ダメだった。

涙が溢れて、止まらない……。

「……！！！」

瞬間、強い力で引き寄せられた。

私の顔が、彼の広い胸に押し当てられる。

「泣けよ。俺が、いてやる」

優しい声がかから降って来た。

耳に響くのは、トクトク鳴る胸の音だけ。温かいその音の中、私は堪え切れず、泣いた。

彼はただ黙って私を抱きしめ、優しく頭を撫でてくれた。

どれくらいそうしていたのだろう。しばらくして、私はそっと身体を離れた。

「もう大丈夫。ごめんね」

涙を拭いた私に、彼は優しく笑った。

「気にするな。俺でいいなら、いつでも胸貸してやる」

「でも、そんなの悪いよ。赤の他人にそんな……」

躊躇いがちな私に、彼はきっぱり言った。

「いいつて。他人で気が引けるならさ、今から俺の事、兄貴だと思えばいい」

「兄貴？」

問いかけた私に、彼はにっこり笑った。

「そう。兄貴。言ってみな。“お兄ちゃん”て」

「お、お兄……ちゃん……」

戸惑いながら口にすると、彼はいつそうにこやかに笑った。

「よく出来ました。じゃあ今からお前は俺の妹！な！」

何だか照れくさくて無言で頷くと、くしゃりと頭を撫でられた。

「これからは、泣きたい時はお兄ちゃんを呼びなさい。いつでも飛んで行ってやるから」

「………うん」

照れながら頷くと、彼はふと思いついたように「いいものをやる」と部屋の隅に置いたカバンを漁り始め、何かを取り出した。

「これ。お前にプレゼント」

ポンと手渡されたそれは、某ペンギンキャラクターの携帯電話だった。

「……これって、電話？」

「そう。俺、二台持ってるんだ。それは予備のやつ。お前にやるよ」

「こんなの、もらえないよ！」

慌ててつき返そうとすると、彼はなおも笑顔で言った。

「いいんだよ。お前、寮の部屋に電話ないだろ？いちいち取り次いでもらうの面倒なんだよ。今日みたいに待ち合わせに困るし。頼むからそれ、持ってきてくれ」

そう言われては………。

躊躇いながらも、私は渋々その電話を受け取る事にした。

「……あ、ありがとう」

「あ、請求書はお前に回すから、自分で払えよ？」

それならと胸を撫でおろした。電話を貰うのは心苦しいが、料金は自分持ちでいいと言うなら安心だ。

「もちろん！大丈夫。そこまで迷惑かけたりしないから安心して！」

そう言って笑うと、彼は満足そうに微笑んだ。

「よし。じゃあそいつは今日からお前の物な。大事にしるよ」

「うん！ありがとう！」

手の中の小さな電話を胸に抱きしめ、思いつきり笑った。

外はまだ、土砂降りの雨。だけでもう、苦しくは無かった。

お兄ちゃんがいてくれる。それだけで、救われる気がした。

偽りでも良かった。本当の家族より、家族である気がした。

この日、この瞬間。私はこうして、“お兄ちゃん”の“妹”になったのだ。

Act・12} 兄妹} (後書き)

< 次回予告 >

ようやく手に入れた筈の安息。

抗えぬ現実には、残酷に彼女を打ちのめす。

次回【ドロップ】

第二章「傷跡」

Act・13} 冷たい現実}

癒えない傷が、私を壊す……。

Act・13 冷たい現実

あの雨の日からもう二週間。

あの携帯電話は、結局まだ一度も使えないまま、今日もベッドサイドに鎮座している。

いつでもかけていい、とは言われたけど、何となく使うのは躊躇われた。

(大体、何を話したらいいの?)

用事は特に無い。かといって、また会いたいと言うのも何だか違う気がする。

こうして電話まで貰ったとはいえ、彼は本当の兄という訳ではないし、だからといって付き合ってる訳でもない。

私と彼は、たかだか数回会っただけの、たまたま職場が近いだけのただの他人。

そんな私が彼に電話したところで、一体何を話せばいいのか。電話を手に、溜め息を吐いたその時だった。

コンコン!

部屋のドアが叩かれた。

「はあい?」

『沙織、ちょっと来てくれる?』

それは、同期の友達、真由まゆの声だった。

私は電話をベッドに置き、部屋の外へと出た。

そこにいたのは、仲の良い同期の友達三人組だった。

長い黒髪に細身の長身で細身な美人の真由^{まゆ}。大柄でボーイッシュな夏妃^{なつひ}、眼鏡が似合う理知的な真琴^{まこと}の三人は、何やら神妙な面持ちで私を見つめた。

「真由！夏妃に真琴まで！どうしたの三人とも？」

戸惑いがちに尋ねた私に、真由は長い髪をかきあげ、棘のある声で言った。

「ちょっと話があるんだよね。こっち来てくれる？」

私は三人に連れられ、人気の無い非常階段の隅へと移動した。最初に口を開いたのは真琴だった。

「あのさ、アンタあたしらの事、友達だっと思っててるでしょ？」

眼鏡を指で押し上げながらキツイ口調で言った彼女の言葉に、私は思わず驚きの声をあげた。

「は！？そ、そりゃ、そうだけど……。何、いきなり？」

尋ねられた真意が分からず戸惑う私に、今度は夏妃が口を開いた。

「あのさ、ボクは君とゲームとかの趣味も合うし、よく話してて、友達とか思われてたかもしれないけど、それ、誤解だから」

夏妃の言葉に、私は一瞬絶句した。

『誤解だから』って、一体何？それ、どういう意味？

「分かんないって顔してるね。ま、そうだろうけど」

真由が呆れたように溜め息を吐き、言葉を続けた。

「あのさ、アンタ、最近調子乗り過ぎじゃない？真琴から聞いたよ。この間の日曜、笹宮さんの部屋行ってご飯作っただって！？」

その言葉に、真琴が続いた。

「ばっかじゃない！？フツーやらないでしょ！夏妃が笹宮さんの事好きって分かってやってんの！？」

真由が、まるで汚い物でも見るみたいに嫌悪感と怒りを滲ませた目でこちらを睨んだ。

「誘われたとか言ってたらしいけど、どーせアンタから誘ったんでしょ！？マジサイテー！！」

睨みつける真琴、真由、夏妃の三人に、私はたじろぎながら口を開いた。

「……え、そ、そんな事……。夏妃が笹宮さんの事好きとか、知らなかったし……」

知ってたら誘われても断ってた。

友達の好きな人と二人きりで出かけるほど馬鹿では無い。

「しらばっくれないでよね！夏妃は前から笹宮さんの事話してたじやん！」

「で、でも、好きとかそういう話は聞いた事無かったよ？」

確かに夏妃は彼の話をしていた。

けど、それは同じ職場の先輩でそういう人がいる、程度の話で、彼を好きだとかは一度も聞いた事が無かった。

「ばっかじゃないの!? 言わなくたって察するのがフツーでしょ!」

真由は心底呆れたように言い、容赦なく怒りの視線をこちらに向けた。

「そうだよ!! そんなに男欲しい訳? だったら援助交際でもしてれば!?!」

掴みかかるように叫ぶ真琴に、私は思わずビクリと身をすくませた。

「いいかげん我慢限界なんだよねー、ウチら。友達面で話しかけられるのいっつもウザくてしょうがなかったし!!」

そう言っただけ私を見た真由の目には、まるで汚い物でも見るみたいに嫌悪の色が滲んでいた。

「とにかく。もうボクらに話しかけないでくれるかな。他の人に親友とか言われるのも凄い迷惑だからやめてよね」

口調は穏やかだけど冷ややかな視線を向ける夏妃に、私の心が酷く軋んだ。

夏妃とは、入寮した当時から色々趣味の話で盛り上がってて、自分では本当に親友だと思ってた。

この4人でカラオケに行ったり、外に食事に行く事もよくあった。

本当に、友達だと思ってた。なのに……。

向けられる冷たい視線は、彼女達が本当は友達なんかじゃなかったんだと、信じたくない現実を、これ以上ないくらい明確に示していた。

「わかった！？これからもう二度とアタシらに友達面して話しかけないで！！」

これ以上ないくらい冷たい声で言い放ち、真由はフンツ！と息も荒く背を向けた。

「行こう、二人共！！」

振り返りもせず、三人はその場を去って行った。

残された私はただ茫然と、その場にへたりこんでいた。

どこで、間違えたのだろうか。

笹宮さんの事を彼女達に相談したのが悪かったのか。

私が彼に料理を作った事がいけなかったのか。

それとも、そもそも彼と出かけた事がいけなかったのか。

考えても答えは出なかった。ただ一つはつきりしているのは、私が友達だと思っていた彼女達と笑い合う日は、もう二度と来ないだろうという事だけだった。

「……………なんで……………」

どうしてこんな事に？

ようやく抜け出したと思ってたのに。

あの、地獄みたいな孤独な生活から、やっと抜け出せたと思ってたのに。

新しい場所。新しい友達。新しい日々。
ようやく手に入れた安息が、いともあっけなく壊れた。

夢なら、醒めてよ!!

願うものの、冷たい床の感触は現実のまま、夢に変わる事は、無かった。

Act・13 冷たい現実 (後書き)

<次回予告>

迫害。蔑み。消えない記憶。

痛みの中の再会は、幸か不幸か？

次回【ドロップ】

第二章「傷跡」

Act・14 思わぬ再会

癒えない傷が、私を壊す……。

Act・14 思わぬ再会

しばらく失意のまま茫然としていたが、やがてのろのろと立ち上がった。

このまま寮内にいるのはあまりに辛すぎる。

どこで彼女達と会うかもわからないし、部屋にいて、また彼女達に何かを言われるかもしれない事を考えると、部屋で寝る気にもなれない。

どこでもいい。とにかく外へ出よう。

私は一旦部屋に戻ると、適当な服に着替えて財布の入ったバッグと自転車の鍵をひつつかみ、寮の外へ飛び出した。

夜の街の中、あてもなく自転車を走らせる。

このまま何処かへ行ってしまうおうか。そんな事を思いながら、ただただペダルを漕いだ。

無心になって走っていると、やがて駅前に辿り着いた。

もう22時を回ろうとしていたが、駅前はさすがに人通りが多く賑やかな音と声で溢れている。

私は駅前の自転車置き場に自転車を置き、近くの漫画喫茶に入る事にした。

幸い今日は土曜で、明日は休みだ。このまま落ち着くまで外で過ごすても問題ないだろう。

「いらっしやいませ」

入店した私を、店員さんが笑顔で迎えてくれた。

私は身分証を提示して手続きを済ませ、個室へと移動して溜め息を吐いた。

さっき起きた事が、頭の中をぐるぐるしている。

まさかあの三人があんなふうに思っていたなんて。ついさっきまで考えもしなかった。

ずっと友達だと思って来たのだ。それなのに……。同じ思考がぐるぐる回る。振り払おうとしてもまたすぐに浮かぶ三人の顔と声。

向けられた嫌悪と憎悪の目が、どうしようもないくらい痛くて、悲しかった。

あんな目で見られたのは中学以来だ。

高校に入る直前まで、10年間という長い期間に渡り行われた私へのいじめ。

散々向けられた、汚い物を見る目つきと態度。

慣れていたとはいえ、さすがに友達だと思っていた女の子にそういう物に向けられたのは初めてだった。

私へ蔑みの目を向けるのは大抵男子ばかりで、女子は遠巻きに見ているか、あるいはこっそり味方してくれるかのどちらかだった。それが、まさかあんなふうに剥き出しの敵意に向けられる事になるなんて……。

信じたくない半面、あれだけ酷い扱いを受けて来た私が、たかだか場所が変わったくらいで普通の人と同じになれるなんて、甘い幻想だったのかもしれないという絶望的な考えに納得してしまっている自分がいた。

そもそも私は、人に受け入れられるような立派な人間ではない。一般的には子を庇護するだろう親にさえろくな扱いを受けて来なかったんだから。

考えれば考えるほど自分に絶望していく。そもそも生きている価値自体ないんじゃないか、なんて事まで思い始めた。

ダメだ。これ以上考えてたらホントにダメになる。

私はおもむろに個室の外に出て、ドリンクバーにあるお茶をコップに注ぎ個室へと持ちかえった。寮の部屋から持って来たバッグから薬袋を取り出し、中から幾つかのシートを取り出す。パキパキと慣れた手つきで錠剤を取り出し、それを掌に乗せ、お茶と共に喉に流し込む。鍵をかけた個室の中、私はゆっくりとリクライニングチェアを倒して横になった。

もう何も考えたくない……。

身体を襲う鈍い痛みに耐えながら、私は早く薬が効いてくれる事を願い、目を閉じたのだった。

再び目を開けた時、時計は朝の5時を示していた。

私はバッグと伝票を掴み、おもむろにカウンターへと向かった。清算を済ませ店の外へ出ると、もう外は明るくなっていて、ちらほらと駅に向かう人が見えた。

「ん……」

朝靄の中、私は軽く伸びをして歩き出した。

まだぼんやりするけど、もうじき意識もはっきりしてくるだろう。自転車置き場に停めて置いた自転車の鍵を開け、自転車を押して歩く。

さて。これからどうしたものか……。

まだ寮に帰るのは何だか躊躇われる。

かといって、このままあてもなくブラブラするのもし……。
などと考えながら交差点で信号待ちをしていたその時だった。

あっ!!

横断歩道の向こう側に、見知った顔があるのを見付けた。

(何で、こんな時に……)

今一番会いたくて、会いたくなかった、その人。

お兄ちゃん。

向こうもこちらに気付いたのを見て、私は思わず踵を返した。
そのまま自転車にまたがり、急いでペダルを漕ぎ出す。

「おい!ちょっと待てよ!!」

後方から声がして、追い掛けて来る気配がした。

「こら待て!何で逃げるんだよ!?!」

何でって言われても。

私もよく分からない。だけど、今顔を合わせるのとは、何となく嫌だ
った。

「待ってって言うてるだろーがあっ!!」

更にペダルに力を込めて加速したその時だった。

「うわっ!!」

派手な音がして、後ろで人が転んだ気配がした。

「いつてえ……」

思わずブレーキをかけ、後方をみやる。

案の定、彼が物凄い体勢で倒れているのが目に入り、私は慌ててそちらに引き返した。

「だ、大丈夫!？」

倒れている彼の顔を覗き込むと、彼は膝をついて立ち上がった。

「はは、何とかね。それよりお前、何逃げてんだよ?お陰でこんな怪我する羽目になったじゃないか」

苦笑する彼に、私は思わず申し訳ない気持ちに駆られた。

「ごめん……」

ふうーっと大きな溜め息を吐き、彼は仕方ないな、というような表情を浮かべた。

「いいよ。許す。お兄ちゃんはそんなに心狭くないからな」

その優しい顔と声に、私は何だか胸が痛くて、無性に泣きたい衝動に駆られた。

「ありがとう……お兄……ちゃん……」

その時だった。ふいに雨が降り出し、私達はとりあえず近くの立体駐車場へと移動する事にした。日曜の、しかも早朝だけあって、私達以外人は誰もいない。

シンとした駐車場の中、ただ静かに降る雨の音だけが響いている。

「しばらくここで雨宿りしよう」

私は無言で頷いた。

「……なあ、お前、何でさっき俺を見て逃げたんだ？」

私は俯き、しばらく沈黙した後、やがてゆっくりと口を開いた。

「……怖いから」

「は？怖いって、俺が？」

驚きの声をあげられ、私は思わず叫んだ。

「違うの！お兄ちゃんが怖いわけじゃないの」

「じゃあ、何が怖いんだ？」

「ん……」

思わずふうーっと大きな溜め息を吐いていた。

出来れば話したくない。知られたくない。お兄ちゃんには……。

「なんか、訳があるんだろ？良かったら話してみろ、な」

胸が苦しくなる。そんな優しい声で言われると、ちよつと、辛い・
・。。

「…………ん。ちよつとね、色々あって」

自嘲気味に笑ったその時だった。

「お、お兄ちゃん!？」

私の身体は、お兄ちゃんの腕に引き寄せられ、抱きしめられていた。

「いいから、このまま聞け」

抱きしめる腕に力が込められた。

「お前が何を怖がってるのかわからないけど、俺は、お前を傷付けたりしない。だから、大丈夫だ。安心して、そばにいていいんだよ」

言い聞かせられるように言ったその瞳は真剣で、この人になら、何を言ってもいいのかもしれないと思いつながら、それでも私は、躊躇いを消せなかった。

「だめ…………。だめなんだよ、あたしは…………」

小さく呟くように言って離れようとしたけど、すぐに強引に腕の中へ引き戻された。

「…………!!」

熱が、伝わる。外には雨の檻。

重なる唇が、私の思考を、停めた
・
・
・
・
。

Act・14「思わぬ再会」(後書き)

<次回予告>

告げられる想い。

それは気まぐれか、それとも……。

次回【ドロップ】

第二章「傷跡」

Act・15「告白」

癒えない傷が、私を壊す……。

Act・15 告白

熱が、広がる。

塞がれた唇が、熱い……………。

「……………んっ、んんっ」

吐息を漏らし、それでも私は、なんとか腕から逃れようともがく。瞬間、一層強く抱きしめられた。塞がれた唇が、なおも熱を増していく。

痺れるような感覚が体中を駆け巡って、私はもう何も考えられず、ただ身を任せた。

やがてスツと力が抜け、ようやく自由が戻って来た。

パンツ！

思わず叩いた頬が、乾いた音をたてた。

「ばっかっ！！」

「あっ！おい、待てよ！！」

雨の中走り出した。

めちゃくちゃに走っていると、あっという間に手を掴まれてしまった。

「離して！！」

「逃げるなよ！！ちょっと落ち着けて！！」

慌てる彼に、私はヒステリックに叫んだ。

「いや！離してっばー！！」

何とか離れようと暴れたが、がっしり掴まれた腕をぐいっつと引き寄せられた。

「んっ、んんっ……！！」

塞がれた唇の熱に浸食されて、力が抜けていく。押しつけようと頑張っても、彼の腕はびくともせず、私は抵抗を諦めた。

やがて、ようやく離された唇が優しく動いた。

「ほら、戻るぞ。ここじゃ濡れるし、自転車、置きっぱなしだろ」

仕方なく頷き、私は彼に連れられ、元いた駐車場へと戻って来た。降りしきる雨を見つめ、私は小さく呟いた。

「……バカ……」

「ん？何だ？」

キョトンとして尋ねる彼に、私は思いつきり大声で叫んだ。

「バカって言ったのよ！何であんな事！？」

怒りでふるふる身体を震わせている私に、彼はにっこり微笑んだ。

「ん、嫌だったか？」

「……い、嫌っていうか、その……と、突然過ぎて、どうしていいか……」

顔が熱くて、思わず俯き加減になった私に、彼はサラリと言った。

「可愛いな」

「なっ！何言ってる!？」

「お前のそういうところ、俺、凄く好きだぞ」

顔が、熱い。

目の前の彼は、ニコニコと実に楽しそうに笑ってる。

その笑顔が何だか無性に憎らしくて、ワナワナ身体が震えた。

「あ、あなた……」

「こらこら。俺の事はお兄ちゃんと呼べと言ったでしょ」

「あ、兄があんな事するかー!？」

思わず叫ぶと、彼はまるで何でもない事みたいにサラリと言った。

「だって、血は繋がってないんだし。問題ないでしょ？」

「そ……」

「そ?」

「そんな理屈、あつてたまるか——!!」

吠えるように叫んだ私の前で、彼は極上のスマイルを浮かべた。

「だって、お前の事好きになっちゃったんだから、仕方ないだろ」

は？

思わず耳を疑い、その場に固まった。

「……今、なんて？」

「いや、だから、仕方ないだろ」

「その前っ!!」

「好きになっちゃったんだから」

あっさりと言う彼に、私は凍りついた笑顔を浮かべ、ゆっくりと口を開いた。

「好きになっちゃったって……誰を？」

彼は相変わらずニッコリ笑っている。

「お前を」

「誰が？」

「俺が」

思わず頭の中で反芻してみる。

『誰を?』『お前を』『誰が?』『俺が』

て………、つまり………。

浮かんだ答えはシンプルで、なのに酷く現実感が無い。

私は信じられない気持ちで彼を見つめ、ゆっくりと口を開いた。

「あの………笹宮さん?」

「いや、だから俺の事はお兄ちゃんと」

「そんな事はこの際どうでもいい!誰が誰を好きだって!?!」

詰め寄った私に、彼はこれまた何でも無い事のようにサラリと言った。

「いや、だから、俺がお前を」

「ええええー!?!?!」

静かな駐車場内に、私の絶叫が響き渡った。

Act・15〜告白〜(後書き)

<次回予告>

彼女は願う。束の間でもいい。
せめて今だけ、溺れていた
い。

次回【ドロップ】

第二章「傷跡」

Act・16〜熱〜

癒えない傷が、私を壊す……。

「あんだ今、自分が何言ったか解ってるの!？」

思わず詰め寄った私に、彼はいたって冷静な声で言った。

「そうわめくなよ。俺がお前の事を好きだと、何か問題あるのか？」

「大ありよ!だって、あたしは……」

要らない人間なのに。

沢山の人に拒絶され、蔑まれて、後ろ指さされて来た。

それは、私が【普通じゃない】から。

【あの家】で生まれ、育った私は、結局どこまでいっても【普通】とは違う。

多分、私の【普通】の感覚そのものが一般の【それ】とズレている。掃除が出来ないとか、そんな問題だけじゃない。私の中にある価値観は、多分、人のそれとかなりのズレがある。何が悪いのか分からないくらいに。

だから私は、あそこから逃げ出すしかなかった。【あの家】にいる限り、【普通】になんかなれっこないから。

だけど、甘かった。家を出たくらいで【私】が変われる訳じゃない。もう手遅れ過ぎるくらい【おかしい】んだから。だからこそ、友達だと思ってたあの3人だって、あんなに簡単に私を拒絶した。私が【普通じゃない】から。皆の考えるような事が分からないから。だから……。

怖い。

大事な分だけ。失うのが、怖い。考えるだけでたまらなくなるくらい、怖い。

『好き』なんて言葉、信じられない。たとえ今、本当に私が好きなんだとしても、いつ嫌になるか分からない。だって、【私】を知ったらきつと、嫌いになる。私は【普通じゃない】んだから。

私は【おかしい】。だから、親も、学校の子達も、真由達も、皆、簡単に私を見捨てて、【拒絶】した。【おかしい】人間なんか【要らない】から。

この人だって、きつといずれそうなる。私なんか【要らなく】なる。絶対に！！

嫌だ。そんなの。【要らなく】されるくらいなら、自分から離れる！あんな思いするのは、もう、嫌　　。．．．。

泣き出しそうになった私の前で、彼はゆっくりと口を開いた。

「．．．．お前が何をそんなにためらってるのか知らない。話したくない事なら無理には聞かない。だけど俺は、たとえ何があっても、お前の手を離してやるつもりはない」

きつぱりと言い放ち、真剣な顔で言葉を続けた。

「お前は俺の妹で、俺のいちばん大事な女だ。ずっとそばにいて欲しい。もっとも、嫌だって言っても諦める気はさらさらないけどな」

「．．．．でも．．．．だってそんな．．．．信じられない．．．．」

どんな言葉を並べたって、きつと最後には手を離す。

【私】を知ったら、きつと私を嫌になる。真由達と同じように。

そんなの、耐えられない……………。

思わず俯いたその時だった。

「……………っ!!」

抵抗出来ないほど強い力が、唐突に私を引き寄せ、唇を塞がれた。

「んっ……………んんっ……………」

引き離そうとした腕を簡単に掴まれ、私は逃げる事も出来ずもがく。重ねられた唇が、熱い。痺れるような感覚の中、口角を割ってぬるりとした感触が中へと入って来た。そのまま私のそれを絡め取り、くちゅりと淫らな音をたてた。

唇から伝わる熱が頬に、首に、身体中に、伝染していく……………。

ダメ……………もう……………。

甘い痺れが駆け抜け、彼に身を任せたその時、ようやく唇を解放された。

「……………これでも、信じられない?」

耳元で囁かれた甘い声に、思わずビクリと身体が震えた。

「……………ばか」

思わず俯いた私の耳に、ふうっと息が吹きかけられた。

「ひゃんっ！」

ビクリと震えた私の身体が、彼の腕に優しく抱きしめられた。

「……………好きだよ」

囁かれたその声に、私は軽い眩暈を覚え、再び唇が塞がれた。甘い痺れの中、彼の甘い匂いと体温が、私の全てを溶かすように包んだ。

「……………んっ、ふっ……………」

もう抵抗はしなかった。

私はそのまま彼の背に腕を回し、身体を預けた。

熱が広がる。駆け抜ける甘い痺れに酔いしれ、溺れていく。

耳に響くのは、微かに漏れる吐息と、遠くに聞こえる雨の音だけ。

世界に二人だけのような甘い錯覚の中、降りしきるキスの雨に身を委ねる。

今だけは、このまま……………。

この人はいつか投げ出すだろう。

私を拒絶して来たたたくさんの人のように。昨夜の彼女達のように。

それでもいい。今この瞬間。ほんのひと時でもいい。

この人と、いたい……………。

言えない想いを胸に、私は甘い痺れに身を委ねた。

少しでも多く、この熱を、覚えていられるように……………。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3028o/>

ドロップ

2011年1月27日13時04分発行